



殺人行おくのほそ道
(上)

松本清張

きつじん こう
殺人行おくのほそ道^{みち}山

まつもと せいちょう
松本清張

© Seicho Matsumoto 1984



講談社文庫

定価420円

昭和59年8月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183321-9 (0)



講談社文庫

殺人行おくのほそ道 (上)

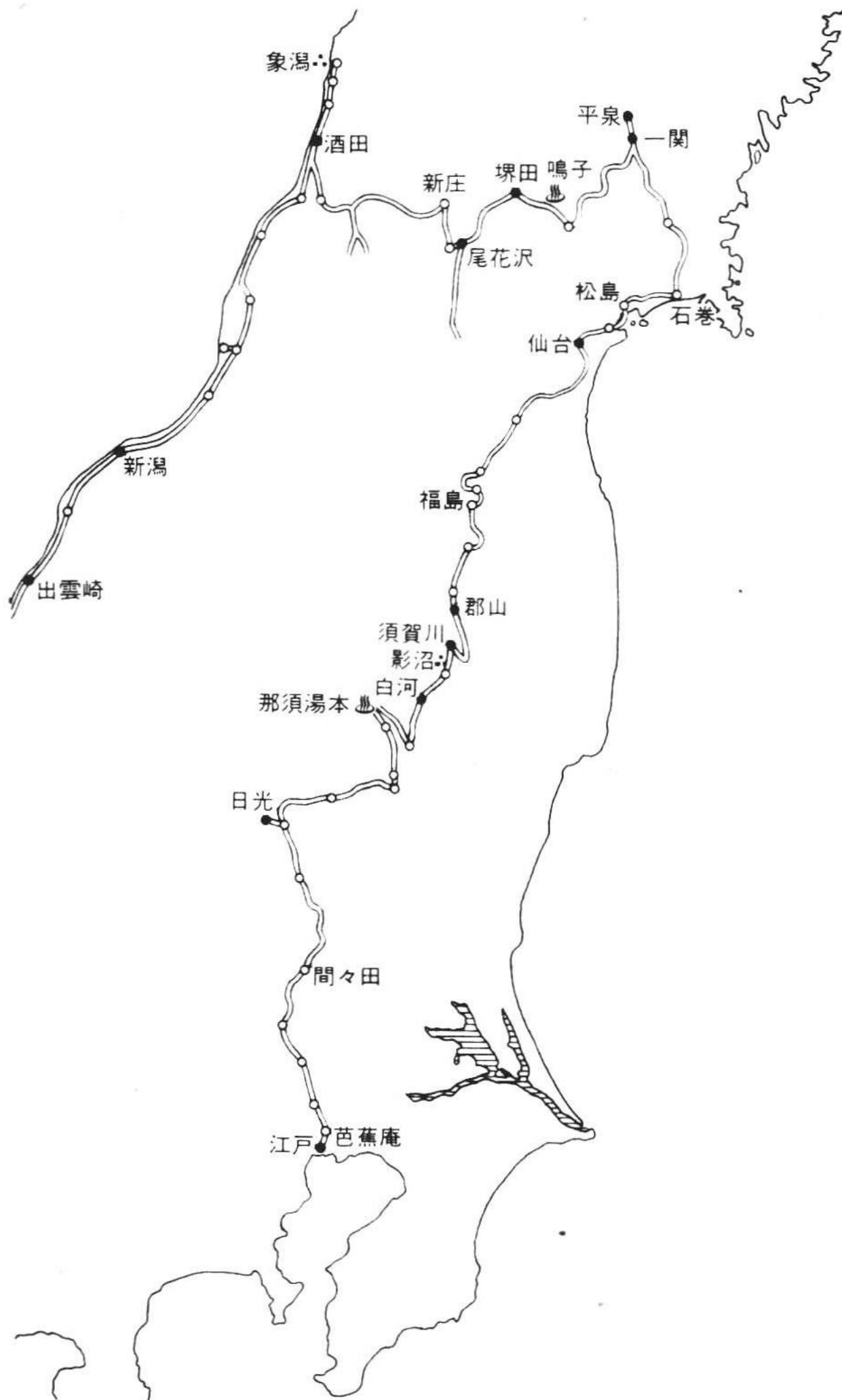
松本清張

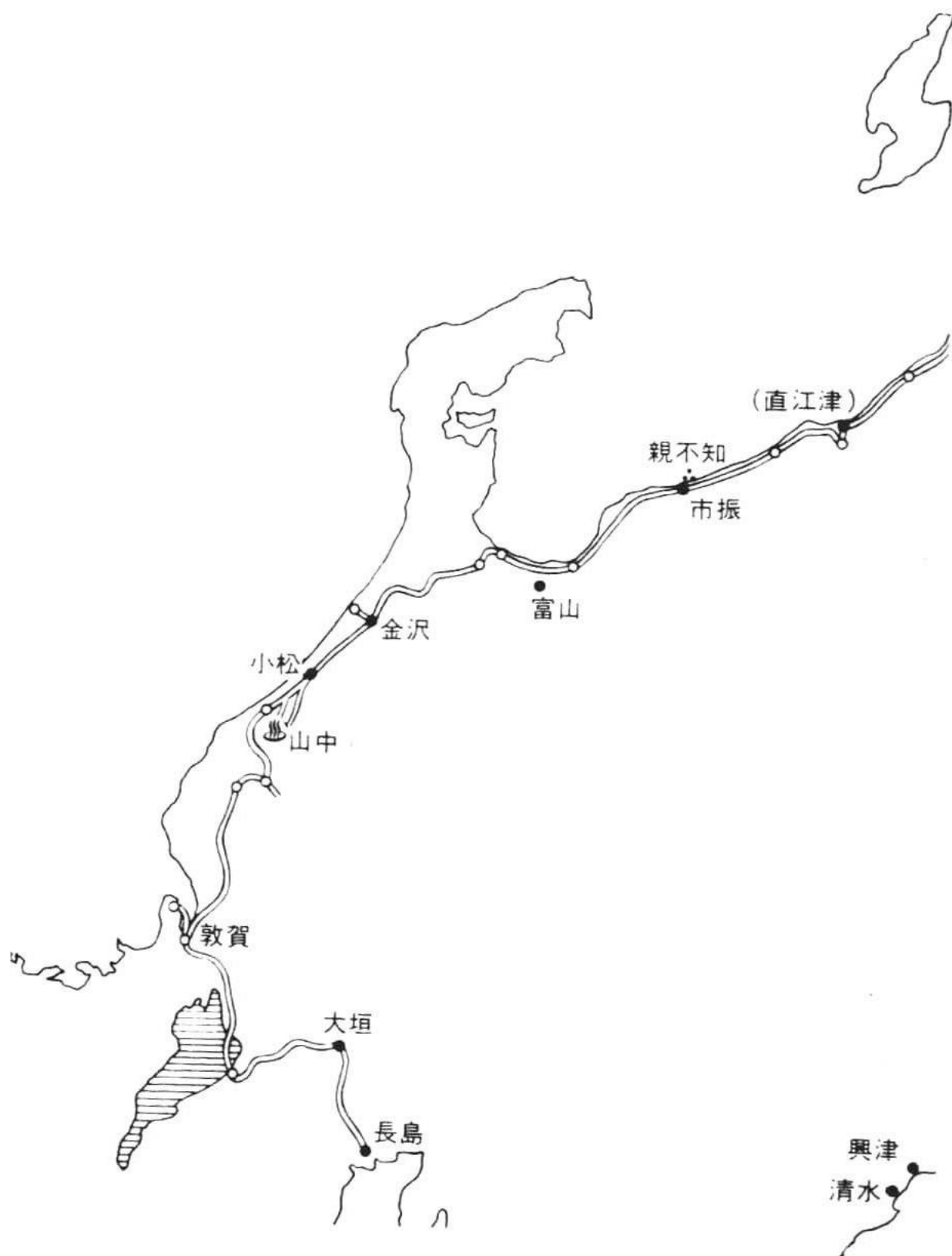
講談社

目次

地図

殺人行 おくのほそ道(上)





この小説は、昭和三十九年七月から昭和四十年八月まで雑誌「ヤングレディ」に連載した小説「風炎」である。終始『おくのほそ道』に関連しているので、今回、単行本にするにあたり、『殺人行 おくのほそ道』がいいと思うので、これに改題した。

——著者

殺人行おくのほそ道
(上)

1

倉田麻佐子に一つの記憶がある。――

彼女がまだ大学の二年生だったから、今から五年前に当る。叔父の芦名信雄といっしょに仙台から山形を回ったことがあった。あれは懐しい旅だった。

「麻佐子」

渋谷の家に遊びに行ったとき叔父は云った。

「来月は飛び石連休があるね」

五月の初めは暦の上でそうなっている。

「何か予定があるかい？」

信雄は癖の、すぼめるような眼つきをした。長身だが痩せていた。年齢より老けて見えるのも丈夫でない証拠である。

「別に決めてないけど」

そのゴールデン・ウィークは麻佐子も年の初めから楽しみにしていた。その年の五月は祭日と日曜とが一日おきにあり、これに土曜日が加わっている。

「もうとっくに決っているかと思った」

麻佐子は、前から、その連休をどう埋めようかと考えてないではなかった。むしろ思案に過ぎず、決らなかったといえる。多勢の友だちと相談したのがいけなかったのかもしれない。衆議まぢまちで、結局、宙ぶらりんの恰好になっていた。

「決ってなかったら、どうだ、叔父さんと久しぶりに旅に出かけてみるかい？」
「旅ですって？」

この叔父が旅行に出るなどとは考えてみたこともなかった。

「素敵だわ。でも、大丈夫なの？」

「何が」

「そんなお弱い身体で」

「こら、年寄を軽蔑するな。これでも君の歩けるぐらいのところは歩けるよ」

「まあ、うれしい。旅もだけれど、叔父さま、元気になられてうれしいわ」

信雄は日向の明るい縁側に坐って、庭の一方を眺めていた。植込みの竹には四月半ばの明るい陽が当り、葉の隙間から青い空がこぼれていた。眼は愉しそうであった。

「どこに参りますの？」

「芭蕉の『おくのはそ道』はどうだ？」

麻佐子は信雄の顔をみつめた。

「芭蕉ですか。叔父さまらしい趣味だけど……田舎歩きね」

「むろん、田舎さ。だが、五月の初めだというと、恰度、芭蕉が金色堂から奥羽山脈を越えて山形に出た頃だ」

「五月雨をあつめて早し最上川、ですか」

「昔の暦と今の暦とはもちろん違っている。季節的にはもう少し先になるだろうが、五月と呼ぶことには変りはない」

「平泉の中尊寺に行くんですか？」

麻佐子は眼を輝かした。

「むろん、松島を端折ってでも中尊寺の光堂ひかりどうを拝観せねばなるまい。そうだ、長い旅だとわたしも飽いてくる。いっそ平泉を起点にしたらどうだろうね」

「すてき」

麻佐子は両指を組み合わせた。

「叔母さまもごいっしょでしようね？」

「いや、あれは無理だろう。今度は麻佐子と二人で行きたい」

「叔母さま、ごいっしょ出来ないの？ つまらないわ」

麻佐子は叔母の隆子が好きだった。叔父とは一回りだから十二歳違いの三十九だが、叔父が老

けているのに比べ叔母は若く見えるからもって年齢の開きがあるようであった。色が白くて上品な顔立ちで、殊に着物で立っている叔母をうしろから見るのが一ばん好ましい。小さいときは、この叔母を持っているのが麻佐子の自慢だった。ときたま友だちを呼んで、わざわざ叔母を見せたものである。友だちは麻佐子の期待にたがわず、まず口々に叔母を賞めた。

「麻佐子といっしょに短かい旅に出るのは何年ぶりかな。そうだ、あれは君が小学二年生の頃だったかな。ぼくが手を引いて汽車に乗せ、軽井沢まで行ったことがあったな」

麻佐子もそれはおぼえている。その夏休みに叔父の別荘に行った。それは旅というのではなく、その別荘で待っている叔母を訪ねたのである。あのときは向うに叔母がいたから楽しかった。

「叔母さま、どうしてごいっしょ出来ないの？」

「彼女は忙しいからね」

叔父の口吻は、気のせいかな少し寂しそうだった。

隆子は都心に洋裁店を経営していた。かなり大きく、デザイナーが三人いて、縫子さんも十五人ぐらいいた。

叔母の隆子には、そういう経営の才があった。デザインのほうは最初自分でやっていたが、あとは腕のいいデザイナーを招き、これがうまく当たった。個人経営だが、一応、会社組織にしている。叔父が社長で、叔母は専務だった。

隆子は上野駅まで、叔父と麻佐子とを見送ってくれた。おそい夜行列車なので、一晚、車中に睡るのだ。叔母は、サンドウィッチだの、チョコレートだの、ジュースだのを洒落た籠にいっぱい詰めて持ってきた。

「麻佐子さん、叔父さまの看護婦さんになったつもりで行ってね」

窓の外の笑顔もきれいなのである。事実、その近くで見送っている人たちが隆子の姿を見返っていた。春の終りから初夏にかけての女の服装は一変する。隆子は白っぽい着物に錆朱さびしゆの綴帯つづれおびを締めていた。これがたまらなく上品で似合っていた。

麻佐子が、叔父さまは引受けましたと言うと、信雄は怒りだした。ばかにするなと云うのである。だが、汽車が動きだすと、叔父の眼は妻にいつまでも流れていた。

叔父さまは叔母さまが心から好きなのだと思った。麻佐子には、この情景が幸福な思い出として残っている。

一ノ関駅に着いたのは朝の六時という早さだった。駅前の宿で休み、それから車を傭って平泉に向った。あいにくと空が曇り、うす暗い景色だった。

「恰度いい。芭蕉もこんな時期だったのだろう」

信雄は車の中から空を見上げた。

金色堂では高い石段を信雄はわりと平気で登った。杉並木が印象的で、その根かたに一度だけ彼は休んだ。

「叔父さま、麻佐子と二人づれではつまらないでしょ？」

明るい^{からか}擲^な揄^ういだったが、やはり隆子のいないことは叔父には寂しいに違いなかった。

「そうでもないよ」

信雄は眼尻に微笑の皺をみせ、根から腰をあげた。持っている杖は、石段にかかる前に土産物屋で買求めた。

山鳥が杉の葉の間から飛び出して行った。

途中の、弁慶堂という小さな建物の前で寺僧に出遇った。叔父はものを訊いていた。親切な坊さんで、わざわざ上まで案内してくれた。麻佐子は、携えてきた文庫本の『おくのほそ道』を小休止のたびにのぞく。

「兼ねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散りうせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢と成るべきを、四面新に囲みて、葢を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。」

五月雨の降りのこしてや光堂」

信雄と麻佐子は金色堂に入って、その内陣の仏像や、螺鈿^{らでん}細工などを眺めた。だが、藤原三代の栄華を放った金色は見られず、歴史の重みが、剝げた仏像の黒漆や、内陣の格天井、円柱、長押の剝落した絵の具の跡に落ちかかっていた。

「さあ、これからいよいよ山形越えだね」

弁慶の墓、無量光院跡、観自在王院跡などの標示板や毛越寺のある丘を下りて、車に乗った信雄は云った。

「山形へ直行するんですか？」

「そんな顔つきをしなくてもいい。せっかく『おくのはそ道』を辿るのだ。ゆっくりと歩こう」

「芭蕉は尾花沢というところで紅花べにばなでつくる紅べにの製造元に泊っていますわね」

「うむ。きみは試験勉強してきた甲斐があるね。あそこには鈴木八右衛門といって紅花を売買する豪商がいた。これが清風といって俳人でね。芭蕉はそこを頼って行き、句会を催してもらっている」

「そんな豪商なんかはどうでもいいわ。わたくし、その紅花というのにとっても惹かれるの。辞典で調べてきたんですけど、花が咲くのはもう少し先なんですって」

「昔は、その花から口紅などの顔料を取ったものだ。」

まゆはき（眉掃き）をおもかけにおもかけして紅粉べにの花

芭蕉の句だ。今ではすっかり化学製品に押されて駄目になってるらしいがね」

「でも、見たいわ。どんな植物だか。紅花なんてとてもロマンチックなんですもの」

「あるかどうか。まあ、標本程度には作ってるのかもしれない」

山が近く、古い農家の集落をときどき過ぎた。

「芭蕉は、この道を歩いたんでしょうか」

「昔の旧道と、今の新道とはもちろん違うので、なんとも云えない。なあ、運転手さん、どうだい？」

信雄は上機嫌でそんなことを訊いたりした。